

関西障害者歯科
臨床研究会
第6回研究集会

障害を持つ人々に寄り添う
歯科医療を目指して

大会長：有田 憲司（大阪歯科大学 小児歯科学講座 教授）
実行委員長：中嶋 正博（大阪歯科大学附属病院 障がい者歯科 教授）

日時：平成26年6月29日（日）10時30分から16時30分

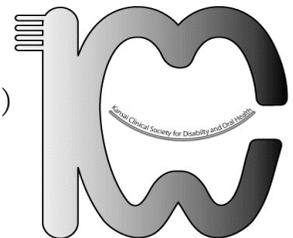
会場：大阪歯科大学楠葉学舎講堂

〒573-1121 大阪府枚方市楠葉花園町8-1

主催：関西障害者歯科臨床研究会（会長 吉田 春陽）

後援：一般社団法人 日本障害者歯科学会

公益社団法人 大阪府歯科衛生士会



第6回 タイムスケジュール

- 10 : 00 開場・受付
- 10 : 30 開会 大会長挨拶
- 10 : 40 特別講演Ⅰ（座長 吉田 春陽）
「障害者歯科 30年の臨床から後輩に伝えたいこと」
前関西障害者歯科臨床研究会会長
西田 百代 先生
- 11 : 40 休憩・昼食（1時間30分）
常任幹事会（常任幹事の方は会議室にお集まりください）
- 13 : 10 会員総会 会長挨拶
- 13 : 30 特別講演Ⅱ（座長 有田 憲司）
「わが国の障害者歯科医療への希望—軽度脳性まひ者の立場から—」
大阪大学大学院 文学研究科 倫理学・臨床哲学研究室 助教
稲原 美苗 先生
「Dental Care for People with Disability in England: A Report」
大阪大学文学部インターナショナルカレッジ非常勤講師
Michael Gillan Peckitt 先生
- 15 : 00 休憩（10分）
- 15 : 10 教育講演（座長 秋山 茂久）
「口腔機能障害—ドライマウスから摂食・嚥下臨床への展開」
大阪大学大学院歯学研究科 高次脳口腔機能学講座
顎口腔機能治療学教室 教授
阪井 丘芳 先生
- 16 : 20 閉会式および研究会事務局からのお知らせ
- 16 : 30 閉会

ご挨拶

関西障害者歯科臨床研究会は今年、6回目の研究集会を迎えることになりました。当研究会が誕生してから5年にわたり、会長としての重責を果たされて会の発展に寄与されてきた西田百代先生に、深甚な感謝の意を捧げたいと存じます。



さて第6回研究集会は、大阪歯科大学小児歯科学講座と大阪歯科大学附属病院障がい者歯科のご協力を得て、大阪歯科大学楠葉学舎で開催させて頂く運びとなりました。

特別講演2題、教育講演1題と、大学が主幹される企画ならではのプログラムで、特別講演Ⅰでは、西田百代先生の長い臨床経験に基づいたお話を「障害者歯科 30年の臨床から後輩に伝えたいこと」としてまとめて語って頂けるものと期待しております。

特別講演Ⅱでは、自ら軽度の脳性麻痺に罹られ、障害者と研究者の両方の立ち位置から生活を送っておられる稲原美苗先生（大阪大学大学院文学研究科倫理学・臨床哲学研究室助教）と、やはり脳性麻痺のご主人 Michael G. Peckitt 氏をお迎えし、「わが国の障害者歯科医療への希望 軽度脳性まひ者の立場から」および「Dental Care for People with Disability in England: A Report」と題して、患者と医療者の架け橋となるお話を伺えるのではないかと存じます。

教育講演では大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能治療学教室の阪井丘芳教授をお招きして、障害者歯科の現場では特に問題になるドライマウスについてお話し頂きます。障害者歯科では口呼吸する患者が多く見受けられ、口呼吸が原因でおこるカリエス・歯周病の発症や進行、強烈な口臭など、臨床的な対応に苦慮する毎日です。「唾液の阪井」として世界に名を馳せておられることは皆様もご存じのことと思います。どうぞ阪井節を存分にお楽しみ下さい。

結びに今研究集会を企画・準備・開催して下さいました大会長の有田憲司教授と実行委員長の中嶋正博教授に厚くお礼申し上げますとともに、会員にとってこの研究集会が有意義なものとなることを祈念してご挨拶と致します。

平成26年6月29日
関西障害者歯科臨床研究会
会長 吉田 春陽



ご挨拶

関西障害者歯科臨床研究会
第6回研究集会
大会長 有田憲司

関西障害者歯科臨床研究会第6回研究集会は、大阪歯科大学小児歯科学講座および障がい者歯科で担当させていただくことになりました。大会長は、小児歯科学講座がこれまで当大学の障害者歯科学の講義および臨床を担当してまいりました関係上私が引き受けさせていただき、実行委員長には昨年8月に新設された附属病院障がい者歯科の中嶋正博教授にお願いし、本日楠葉学舎講堂において開催する運びとなりました。

今回の研究集会のテーマは、「**障害を持つ人々に寄り添う歯科医療を目指して**」といたしました。障害者歯科医療の理想は、障害者の口腔機能障害の改善と口腔疾患の予防・治癒による健康増進ですが、現実にはこのようなことは軽度な障害の方しか達成できません。我々が目指すべきは、どのような障害を持つ方に対しても有効な“生涯にわたり障害者に寄り添っていく「支える医療」”であるという意味を込め、このテーマを掲げました。

寄り添うためには、障害者歯科医療に携わってきた先人の経験や障害者の意見を真摯に受け入れ、常に最新の知識・技術を学ぶ姿勢が求められます。そこで、**特別講演Ⅰ**として本研究会初代会長である西田百代先生（前大阪府急性期・総合医療センター 障害者歯科主任部長）に「障害者歯科30年の臨床から後輩に伝えたいこと」と題してお話していただきます。**特別講演Ⅱ**では、軽度脳性マヒを持たれる稲原美苗先生（大阪大学大学院倫理学・臨床哲学研究室助教）に「わが国の障害者歯科医療への希望—軽度脳性まひ者の立場から—」と題して、さらに、稲原先生のご主人であり同様に軽度脳性マヒを持たれる Michael Gillan Peckitt 先生（大阪大学文学部非常勤講師、英国国立ハル大学名誉研究員）には「Dental Care for People with Disability in England: A Report」と題して障害者のお立場からお話していただきます。また、**教育講演**は、阪井丘芳先生（大阪大学大学院歯学研究科 高次脳口腔機能学講座 顎口腔機能治療学教室 教授）に「口腔機能障害—ドライマウスから摂食・嚥下臨床への展開」と題したご講演をいただきます。

今回一般講演はありませんが、この研究集会が会員の皆様のこれからの障害者歯科臨床に少しでもお役にたてれば幸いです。最後に、本研究集会主催者である関西障害者歯科臨床研究会吉田春陽新会長ならびに研究会事務局の多大なるご支援、ご協力に対し御礼申し上げます。

平成26年6月29日

障害者歯科30年の臨床から後輩に伝えたいこと

西田 百代（にしだ ももよ）先生

■略歴

- 1967年 大阪大学歯学部卒業
- 1971年 大阪大学大学院歯学研究科修了 歯学博士
大阪大学歯学部口腔治療学講座 助手
- 1978年 大阪府立身体障害者福祉センター附属病院 歯科医長
- 1984年 同附属病院 歯科部長
- 2007年 大阪府立急性期・総合医療センター障害者歯科 主任部長
- 2008年 定年退職
- 2009年 関西障害者歯科臨床研究会 会長（－2014年3月）



昭和53年に旧大阪府立身体障害者福祉センターの附属病院に常勤歯科医師として赴任したのは35歳です。当時阪大においては小児歯科で障害児の治療が行われていた以外は、他の診療科では障害患者はほとんど受け入れていませんでした。というのも当時の阪大歯学部においては・・・障害者歯科医療は行政が考えるべきことで、教育と研究の府である大学病院に係るべきことではない・・・という考えの臨床講座の教授が大勢を占めていたといってもいいでしょう。そんなわけですから、卒業後口腔治療の医局に在籍した私は、健常者に対するEndとPerioの臨床が中心で、障害者歯科に関する臨床経験も、医学知識も全く無に等しい状態でした。当時障害者歯科学会の前身の研究会は既にありましたが、会員は数十人程度で、障害者歯科に関する日本語の専門書もわずか2冊しかなかったというのが実態でした。

したがって障害者歯科に関する知識も経験も、頼るべき参考書も指導者もほとんど無の状態です。常勤医を引き受けたわけですから、無謀といえど無謀でしたが、障害者歯科の難しさについて何も知らなかったために、この道に飛び込めたということもありますし、若さゆえに障害者歯科という未知の分野へ挑戦する勇気を私に与えてくれたと思います。

今日お話しするのは、私の30年にも及ぶ障害者歯科臨床の現場で経験した様々な問題や困難、失敗をもとに考え出したオリジナルな方法や考え方です。長年私と共に診療を支えてくれた歯科衛生士、看護師、理学療法士、障害児者の施設職員、障害のある患者本人とその家族の方々など、多くの方々からいただいたアイデア、意見をもとに生み出されたものです。障害者歯科を志す後輩の歯科医師や歯科衛生士

の皆さん方に少しでもお役に立てば幸いです。

- 01：私が障害者歯科の道に入った頃の思い出に残る患者さん。
- 02：ヒヤリハットやアクシデントから生まれた医療事故防止のための工夫
- 03：抜歯の失敗事故から水平位パノラマ X 線撮影ができるまでの約 30 年の軌跡
- 04：歯科と理学療法室、補装具製作所が共同で制作した CP 患者の体動抑制装置
- 05：障害者歯科に役立つ様々なアイデアと工夫
- 06：重症齲蝕を減らすための方策
- 07：抑制具使用の是非について
- 08：高齢障害者歯科のリスクマネジメント

この 30 年間で私が一番大切にしてきたのは、医療事故を起こさないことと、重度の障害者に対しても長期間使用に耐える質の良い治療を行うことの 2 つです。

特別講演Ⅱ

わが国の障害者歯科医療への希望 --軽度脳性まひ者の立場から--

稲原 美苗(いなはら みなえ) 先生



■略歴

- 1991年 3月 三重県立名張西高等学校卒業
- 1997年 12月 オーストラリア国立ニューカッスル大学文学部社会学科卒業
- 1999年 2月 オーストラリア国立ニューカッスル大学大学院社会学研究科修士課程入学
- 2007年 5月 英国国立ハル大学哲学研究科名誉研究員 (2013年 3月まで)
- 2007年 7月 英国国立ハル大学大学院哲学研究科博士課程修了 (Ph. D)
- 2010年 11月 スウェーデン国立ウプサラ大学客員研究員 (2012年 11月まで)
- 2012年 4月 立教大学全学共通カリキュラム兼任講師 (2013年 3月まで)
- 2012年 6月 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属「共生のための国際哲学研究センター (UTCP)」上廣共生哲学寄付研究部門特任研究員 (2013年 3月まで)
- 2013年 4月 大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻 (臨床哲学) 助教 (現在に至る)

■主な所属学会：英国女性哲学学会 (SWIP UK: Society for Women in Philosophy UK) 会員、北欧リサーチネットワーク：ジェンダー・身体・保健医療 (The Nordic Network - Gender, Body and Health) (学会) 会員、応用哲学会会員、日本現象学会会員、

■専門分野：身体論、フェミニスト理論、現象学、障害の哲学

■著書：Abject Love: Undoing the Boundaries of Physical Disability (アブジェクト・ラブ：身体障害の境界への疑問), VDM Verlag, 2009. ほかに多数。

わが国では、医療技術の進歩や少子高齢化の急速な進展による影響、さらに、発達障害や精神障害に対する捉え方の変化による影響などがあり、障害をもつ人口の割合は大幅に増えている。こうした社会的な影響に加えて、1970年代以降の当事者運動などの成果により、障害者は社会から差別され排除されるもの、専門家による医療や福祉の「対象」から、社会の中で生きている「主体」として捉え直されるようになった。しかしながら、このような社会の変化にも関わらず、障害者についての誤解や偏見も未だに強く残っており、それは歯科医療現場でも決して例外ではない。

本講演では、このような障害者に対する誤解・偏見を避け、歯科医師や歯科医療従事者が障害のある患者に寄り添った治療やケアを提供できるように、障害当事者から見た歯科治療現場について考察していく。軽度の脳性まひと共に生きてきた障害者である講演者が、過去の歯科治療の経験で困った事例を報告し、今後の障害者歯科医療のあり方を考察していく。講演者は幼い頃に歯科医療従事者たち数名によって手足を押さえつけられ、歯科医師が治療しやすいように体位を固定された経

験をもっており、30年以上経過した今でもそのトラウマに苦しんでいる。そのトラウマがあるがゆえ、現在でも歯科医師や歯科医療従事者と信頼関係を築くことが難しいことが多い。本講演では、講演者の経験を振り返り、障害のある患者が姿勢保持のしやすい体位でリラックスできる治療環境を整え、ゆっくりと時間をかけて治療を行うことの重要性、そして、そのような患者にトラウマを与えない歯科治療の重要性を訴えたい。

障害を考える上で気をつけなければならないことを、脳性まひを例に挙げて説明する。同じ脳性まひの症状は一つもなく、緊張の仕方・度合い・パターン、つまり障害の程度は人によって異なる。脳性まひを一括りにして考えてしまう専門家も多いのだが、本講演では、患者一人ひとりの特性を見つけることを重視することを促す。さらに、障害者のある患者が経験している環境を正しく把握し、歯科医や歯科医療従事者として適切な接し方を習得することが主な目的である。歯科医療の現場で、歯科医師や歯科医療従事者が障害者に対してどれだけその患者の特性を理解した対応するかが、良い治療へと導く。障害のある患者の立場から歯科医療現場をみると、今までの思い込みや「善意」が通用しないケースが多くあり、一人ひとりの障害特性に基づいた治療方法が要求される。

ここで講演者のような人文系の研究者が障害者歯科医療の改善に貢献できるとしたら、次のようなことが挙げられる。歯科医療現場の具体的な場面で生じている問題を丁寧に解決していこうとする観点から、しかも「専門家」ではなく、むしろ「患者」の立場から医療現場を捉え直し、一つひとつの事例を詳細に記述していくこと、そして、その記述が「障害当事者の経験知」の構築を促し、一人ひとりに合った治療方法を専門家とともにデザインできる可能性を開くと確信している。「歯科医療の専門知」と「障害当事者の知」を繋ぐことはできるはずであり、そのことが新しい知を構築するきっかけになる。歯科医師や歯科医療従事者が一方的にあてる尺度ではなくて、「尺度」自体を患者と一緒に相談してデザインすることによって、歯科医療はもっと障害のある患者に寄り添っていけるのではないだろうか。全ての患者に同じ方法で治療を行うことが正しいわけではない。患者一人ひとりの障害特性を考えて、適切な治療方法を見つけることこそが今後の障害者歯科医療の課題となるだろう。

特別講演Ⅱ

Dental Care for People with Disability in England: A Report

イギリスにおける障害者の歯科事情：報告

Michael Gillan Peckitt 先生



■略歴

- 2001年 7月 英国国立ハル大学文学部卒業
- 2010年 1月 英国国立ハル大学大学院哲学研究科博士課程修了 (Ph. D)
- 2010年 4月 ブリティッシュ・アカデミーの特任研究員
- 2012年 5月 英国国立ハル大学の名誉研究員 (現在に至る)
- 2012年10月 東京大学大学院総合文化研究科 外国人客員研究員
- 2013年10月 大阪大学文学部インターナショナルカレッジ非常勤講師 (現在に至る)

In Britain there are only 3.7 dentists for every 10,000 person. This shortage of dentists makes it difficult to access dental care. Even if one can find a dentist, it is very costly in financial terms for people who seek dental treatment, because as the recession in England worsens, the cost of dental care increases. A ‘filling’ or dental restoration can cost as much as £50, or 9000 Yen, so many cannot afford the cost of going to the dentist.

The situation becomes more complicated if one has a disability. Access to dental care is difficult, and disabled people do not go to the dentist often because it is physically too difficult to do so. People with disability have difficulties finding a dentist because it is difficult to treat someone who cannot stay still, as in the case of physical disabilities, or someone who moves a lot because of a cognitive impairment like autism.

In this talk I shall attempt to explain how dental care in England works, and explain how it is difficult for people with disability (PWD) to access dental care. I shall explain how dental care works in England and outline the situation for people with disability. I shall give particular attention to the dental care needs of people with physical disability and conclude the paper with some suggestions that, given my experience with cerebral palsy and dentistry, may improve dental health care.

イギリスでは人口一万人あたり歯科医は3.7人しかいません。このことが歯科受診の敷居を高くしています。診てくれる歯医者があったとしても歯科治療を受けるには費用の問題があります。イギリスでは景気が悪くなったために、治療費も値上がりしているからです。

詰め物をする、歯の修復処置はおそらく50ポンドくらい、日本円で9000円くらいかかります。そのため多くの方は歯医者で治療を受ける余裕がありません。

障害者にとってはより深刻な問題です。歯医者に行くのにも不便ですし、障害者には身体的に行けない方もいます。障害者を診てくれる歯医者を見つけるのも一苦労です。なぜなら、身体的障害の中にはじっとしていることが難しい人がおり、自閉症など発達障害では診療協力性が低いいため治療が困難だからです。

今回、私はイギリスでの歯科医療がどのようなものか、そして障害者（PWD）が歯科医療を受ける際に困難な現状や場面についてお話ししたいと思います。特に、身体障害者が望む歯科医療について、脳性麻痺である私の経験をお話することで障害者歯科医療がより良くなるためのヒントになれば幸いです。

口腔機能障害—ドライマウスから 摂食・嚥下臨床への展開

阪井 丘芳（さかい たかよし）先生



■略歴

- 1991年 徳島大学歯学部卒業
大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科 研修医
- 1994年 大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科 医員
大阪警察病院歯科口腔外科 医員
- 2000年 米国国立衛生研究所(NIH) 客員博士研究員
- 2001年 日本学術振興会 海外特別研究員
- 2004年 大阪大学歯学部附属病院口顎病態系科口腔外科（制御系） 講師
- 2006年 米国国立衛生研究所(NIH) 客員教授
大阪大学歯学部附属病院 顎口腔機能治療部 部長
大阪大学大学院歯学研究科 高次脳口腔機能学講座 顎口腔機能治療学教室 教授

■主な学会活動、役職、資格

日本口腔科学会 評議員、日本口蓋裂学会 理事、日本ドライシンドローム学会 理事、エビデンスに基づく統合医療研究会 理事、日本抗加齢医学会 評議員・プログラム委員、抗加齢歯科医学研究会 世話人、日本口腔医学科学フロンティア 世話人、日本ドライマウス研究会 世話人、日本口腔外科学会認定口腔外科 専門医・指導医、日本摂食・嚥下リハビリテーション学会 認定士、日本抗加齢医学会 専門医

■主な受賞歴

1. National Institutes of Health, Visiting Program Award (2000-2001年、2004-2006年)
2. Gordon Conference -salivary gland & saliva- Best Poster Award (2003年)
3. 第2回口腔医学科学フロンティア最優秀賞 (2003年)
4. 平成18年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞 (2007年)
5. The 89th American Association of Oral and Maxillofacial Surgeons (AAOMS) meeting, Best Oral Abstract Scientific Award for a presentation 第89回米国口腔顎顔面外科学会最優秀講演賞 (2007年)
6. 平成22年度国立大学法人大阪大学功績賞 (2010年)
7. Gordon Conference -salivary gland & saliva- Best Poster Award (2013年)

■参考文献

ドライマウス—今日から改善—お口のかわき—、医歯薬出版、2010
サイエンス誌に載った日本人研究者 2010、2011年4月
Science 329, 562-565, 2010 & Nature 423, 876-881, 2003

医学の発展に伴い、優れた栄養管理の方法が開発されてきましたが、人は人として、口を使って食事を楽しみながら、人生の終末まで健やかに暮かえたいものです。

我々は誤嚥性肺炎予備軍として、ドライマウス患者の口腔ケア活動を行っています。一般的にドライマウス患者は健常者と比較して、口腔内の自浄性が低く、食塊形成が不良であるために誤嚥性肺炎発症のリスクが高いと言われています。さらに、多剤服用に伴う薬剤の副作用やさまざまなストレスだけでなく、環境の変化も口腔に影響を与えます。口腔環境の悪化が口腔機能に障害をもたらすことも知られていますが、はなかなか治療のポイントがわかりにくいものです。実際にドライマウスから摂食・嚥下障害が生じる様子を示し、すぐに臨床に役立つような知識と対応法を紹介します。

摂食・嚥下障害により生じる問題は誤嚥性肺炎のみではありません。食べることの障害であるため、脱水、低栄養、食べることに對する楽しみの喪失といったQOLに大きく影響します。人間としての尊厳を保つ側面からも、摂食・嚥下障害への基本的な対応は大切です。本日は、本学会のテーマに合わせて、ドライマウスの口腔管理から、摂食・嚥下臨床に重要な基本事項、我々の取り組みについて、わかりやすく紹介させていただきます。ご興味のある方々の参加をお待ちしております。

Memo

Memo